



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

The Study of Considering the Values of Discussions on Line among Graduate Students and Teachers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 眞治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173298

オンラインを活用した 自主ゼミの質の向上を図る取り組みと評価

櫻井 眞 治*

(2021年1月12日受理)

SAKURAI, S.; Value of Online Discussion among Graduate Students and Teachers.

ISSN 2435-3876

This study was performed to examine the value of online discussion among graduate students and teachers to determine ways to solve problems, such as online discussions are not deepened. A questionnaire was sent to graduate students and teachers regarding a lesson studies seminar. The results clarified the value of deeper learning online among graduate students and teachers, and suggested ways to solve the problems. For example, graduate student and teachers learned from each other by focusing on subject selection and elaborating plans for discussion. Furthermore, this study involved problems, e.g., linked group sessions, and carrying out speaking at discussions for graduate students.

KEY WORDS : Online Discussion, Deeper learning, Values of graduate students and teachers.

* *Research Center for Education in the Next Generation, Tokyo Gakugei University*

1. はじめに

筆者はこれまで、学部生・大学院生とともに自主ゼミ「教育実践ゼミ」を、週1回継続してきた。このゼミの主な活動は、様々な授業実践をめぐって語り合うというものである。そこでは、学部生・院生の教育実習における授業実践、筆者が録画した授業映像や教育番組を教材としてきた。参加者は、様々な選修・専攻のメンバーであり、自身の校種・専門教科を大切にしつつも、それを越えて語り合うことを大事にしてきた。会の流れとしては、参加者が研究室に集い、まず報告者からの提案を聞いたり、授業映像を視聴したりする。その後、付箋紙に感想を記入する。そして、その付箋紙を基にして語り合い、記録係が付箋紙を模造紙に位置付けていく。このような活動を通して、その実践のよさ、課題、改善案等を引き出していたのである。

ところが、新型コロナウイルス感染拡大によって、これまでのゼミの活動の見直しを余儀なくされた。そこで、メンバーと相談した結果、オンラインで活動を継続していくことになった。まずは、ゼミの活動を継続できることが何よりであるが、従来と比べて様々な制約がある状況下においても、よりよい場を実現していきたいと願った。

松本は、大学でオンライン授業を実施して気づいたことを述べている⁽¹⁾。そこでは、オンラインの講義は意外にやりやすいこと、例年と同じ課題を出しても、毎回の感想やレポートの質が上がっていたこと等とともに、話し手の意図が聞き手の反応によって覆される余地が少ないこと、つまり「想定外」が少ないことも述べられている。

このような成果を受けて、本研究では、筆者の意図とともに、参加者の意味づけについて考察することを通して、自主ゼミの質の向上に関わる取り組みの成果と課題について明確にしたいと考えた。

* 東京学芸大学次世代教育研究センター

2. 研究のねらいと方法

2. 1 研究のねらい

コロナ禍におけるオンラインを活用した自主ゼミの質の向上を図る取り組みについて、参加者の学びの価値を考察することを通して、その成果と課題を明確にする。

2. 2 研究の方法

2. 2. 1 質の向上を図るための手だて

2. 2. 1. 1 題材の選定と活動計画の工夫

これまで対面で実施してきたゼミでは、筆者の録画した教員や教育実習生の授業映像をその場で視聴し、それを基にして語り合うことを中心にしてきた。しかし今年度のスタート時点では、筆者に動画をアップする技術もなかったため、一冊の本を読んで語り合うことを活動の中心に置いた。そして、筆者の小論や授業記録を読むことも加えることにした。これまでのゼミでは中心に行ってこなかったことであったが、参加者にとって新たに学ばれることもあるのではないかと期待したからである。

2. 2. 1. 2 zoomを活用したグループセッションの導入

これまでのゼミでは、参加人数に応じてグループ活動を取り入れることもあったが、全体で語り合うことを中心にして進めてきた。しかし今年度については、オンライン上での全体活動では、対面よりも一層参加者が意見を出しにくいことが想定された。そこで、運営担当の4年生と相談し、zoomの機能を活用してグループセッションを取り入れることにした。参加者が少人数でたっぷりと語り合えるようにと考えてのことである。そして、2時間のゼミの展開を、話題提供→グループセッション1→グループで話し合ったことの共有→グループセッション2→全体での話し合いというものにした。話題提供とは、担当者が協議題を提案するものである。

2. 2. 1. 3 発言内容や話し合いの展開を共有するための同時記録作成

担当者は共有画面を開き、同時進行で話し合いの記録を取り、発言内容や話し合いの展開の共有を図るようにした。また、その記録は、欠席者にも共有できるようにオンライン上にアップすることにした。

2. 2. 2 分析の対象

分析の対象は、2020年5月から8月に自主ゼミに参加した18名の学部生・院生・現職教員(AからR)のアンケートの記述内容である。なお、学部4年生は、3年次に3週間の教育実習を経験している。しかし、学部3年生は、未経験である。アンケートは、春学期のゼミが終了した8月に実施し、その記述を分析し考察する。アンケートの内容については、運営担当の学部4年生と相談し、下表のようにした。

アンケートの内容

自主ゼミの活動を振り返って、以下の1～4の点について述べて下さい。

1. 題材について（子どもの姿で語り合う校内研究⁽²⁾、奈良の授業に表れる「山場」とその場を支えているもの⁽³⁾、「個の学びと教育」⁽⁴⁾、小3「三年とうげ」授業記録⁽⁵⁾、小4「佐伯宗義がのこしたもの」授業記録⁽⁶⁾）
2. ゼミの展開について（話題提供・グループセッション1・共有1・グループセッション2・共有2と全体での話し合い）
3. 心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
4. 運営上の改善点について（zoom会議の司会役担当について。運営に有用と思われるツールについて。Zoom以外のサービスの活用について。ゼミ後の時間の利用希望について）

2. 2. 3 分析の方法

アンケートを提出した18名の参加者（AからR）のアンケート1から3の記述内容を、分析する。1から3の項目を分析対象にした理由は、本研究のねらいに関わるものであるからである。また、4の項目については、秋学期のゼミ運営に生かしていくものとして活用した。

ここでは、Aのアンケート記述を例にして、分析の手順を述べる。

- ① Aのアンケートの記述から、筆者がAの主張が色濃く表れていると、とらえたキーワードを抽出する。下表内では、太字の部分がそれにあたる。なお、表内の○はよかったこと、学んだことを表し、●は気になったことや、よりよくするためにもっとこうするとよいことである。

参加者Aのアンケート記述から、キーワードを抽出する

参加者Aのアンケート記述	
1. 題材について	
○ 堀川小の実践には驚かされることが多く、常識にとらわれなくて、子ども達に寄り添って教材研究することが大切と感じた。	
○ 単元を通して子どもの成長を考えることは、去年までのゼミではできない経験であった。	
● ○映像がない分、教室の雰囲気がわかりにくいことは残念であるが、その分教材の中身に注目でき、去年とは違った学びがあった。	
2. ゼミの展開について	
● 質の高い意見が多く発表され、内容の整理が追いつかないこともあったので、考えを整理する時間があればいいなと思った。	
3. 心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等	
○ 現職の先生の意見を聞く機会がたくさんあり、とても貴重な経験になった。多様な教育観に触れて考えを深めることが大切だと感じた。	

- ② 抽出したAのキーワードを、成果と課題に分類して、下のように一覧表に整理する。
 ③ 参加者BからRについても同じ作業を行い、似ている意見については集め、一覧表を作成する。

Aのとらえた成果と課題を表に整理する

	1. 題材について	2. ゼミの展開について	3. 心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
成果	○ 常識にとらわれず、子どもに寄り添って教材研究をする。(A) ○ 単元を通して子どもの成長を考える。(A) ○ 教材の中身に注目。去年とは違った学び (A)		○ 現職の先生に意見を聞く機会がたくさんあった。(A) ○ 多様な教育観にふれて考えを深めること。(A)
課題	● 授業映像がない分、教室の雰囲気がわかりにくい。(A)	●考えを整理する時間 (A)	

3. 1. 1. 3 本から得た学びを振り返り、共有する場の設定

活動計画の⑩7/20 『『個の学びと教育』を振り返って、学んだこと』をめぐっては、参加者自身が学んだことを振り返り、仲間と共有することによって、参加者一人一人の学びを総合したいと考えた。

3. 1. 1. 4 授業記録を読み、語り合う場の設定

活動計画の⑫7/27 「授業記録小3国語科『三年とうげ』をめぐって」と、⑬8/3 「授業記録小4社会科・総合『佐伯宗義がのこしたもの』をめぐって」では、これまでの小論や本から得た学びを生かして、授業記録を読み合うことを考えた。紙幅の関係の中で読者にわかりやすく伝えようと、実践の中から抽出し整理されている本とは異なり、授業記録には、ありのままの子どもと教師の姿が表れているからである。このように、これまでに学んできたことの活用編として位置づけることにした。

また、⑬8/3 「授業記録小4社会科・総合『佐伯宗義がのこしたもの』は、⑨7/6 「個の学びと教育 第4章『未来の担い手を育むESDの取り組み』」に関わる公開授業研究会における記録である。そのため、参加者が関連づけて学び、より広く深い気づきが期待できるのではないかと考えた。

3. 1. 2 ゼミスタート後に実施したこととその意図

その他、ゼミのスタート後に実施したこととしては、以下のことがある。

3. 1. 2. 1 ゼミでの学びを広げ深める関連小論の配信

活動の③5/25 「個の学びと教育」第1章「個の確立を目指す学校」の後に、「教育懇談会 一子どもを捉えるということ―」⁽⁷⁾、「教育懇談会を機に考える」⁽⁸⁾、「弱い自分を変えられる職業」⁽⁹⁾を配信した。これは、堀川小学校の子ども理解や、本には表れていない様々な子どもの姿、教師の思い、教師という職業等について、参加者がその認識をより広げたり、深めたりすることを期待したからである。また、本に取り上げられている授業実践について、筆者がその単元計画や学習指導案を所持しているものについては、参加者に事前に配信し、参加者が本と関わらせて読み込んだ上で、ゼミに臨めるようにした。

3. 1. 2. 2 筆者の「もう一言」の配信

参加者への連絡は、運営担当である学部4年生のメンバーと筆者が行っていたが、途中から筆者の出す連絡に「もう一言」を加えた。このことについて、筆者はアンケート3の「心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等」で、次のように振り返っている。

今学期のゼミでは特に、学部生のみなさんからの問いかけに、どのように応えていかれるのだろうか、いつも考えていました。「まだまだ実践経験の少ない中で語っているのだが、そのように思わざるを得ない背景がありそうだ。どのように応えていくと、これからにつながるのだろうか？」そして、ゼミの場では、うまく語ることができなかったことが、「もう一言」につながりました。ゼミ後に、「このように語ればどうだったのだろうか…」等と考えたことを、改めて綴ることになりました。

3. 2 各回のゼミの展開

各回のゼミは、次のように展開された。

- ① 自己紹介、本日の見通しの共有 ⇒ ② 話題提供 ⇒ ③ グループセッション1 ⇒
- ④ グループの話し合いで出された論点の共有 ⇒ ⑤ グループセッション2 ⇒
- ⑥ 全体での話し合い ⇒ ⑦ 話題提供者の心に残ったこと。次回の予定

ここでは、ゼミの様子について具体的に伝えるために、8月3日(月)最終回「授業記録小4社会科・総合『佐伯宗義がのこしたもの』をめぐって」の話し合いの同時記録を、提示する。この回を取り上げる理由は、6月29日、7月6日で扱った章の実践が、今回と同じ教師のものであること。かつ7月6日で扱った実践と、同じ単元の授業記録であること。さらに、春学期の最終回であること。このようなことから、これまでの学びの成果を生かして話し合うことができるのではないかと考えたからである。そして、補助資料として事前に、公開授業の学習指導案、授業記録、板書写真、単元構想を配信した。

3. 2. 1 8月3日の話し合いの同時記録

以下に全体での話し合いの記録を、最初から途中まで抜粋する。ここでは、沈黙の場面と板書構成、ユニバーサルデザインという論点が表れている。児童名は、すべて仮名である。なお発言者のアルファベットは、アンケート回答者と一致している。アンケートに回答を寄せなかった発言者については、S（教職大学院2年）、T（ゼミOB・現職教員）で示した。話し合いの記録者は、Eである。

8月3日の全体での話し合い

- (M) 新くん存在。新くんなりに、何とかしたい、という思い・願いで発言している。そこへの苗さんの関わりがあった。
- (L) 新くんのような意見が出た時、修正をしてしまう場合がある。教師が戻してしまいがちな発言。子どもたちを待ってあげることがとても良い。沈黙を破ったり、個をみとったりしている先生がいるからこそ、このような話し合い、新くんの生きる授業が成立する。沈黙も、「山場」の一つとして捉えられるのでは。そこから深まっていたし、その時の教師の関わりがとても大切になってくる。
- (G) 教師はあまり関わっていない。子ども達に託している感じ。懐の広さ。敢えて引っ張らない先生の良さ。
(筆者) 子どもを信じ切る、任せきることは難しいもの。本時は「子どもに任せている」場面。でも任せきれない自分も自覚していくことは、大切。
- (D) 板書の資料から、子どもに自由に考えさせていることが伝わってきた。子どもから出た意見をリアルで追ってつくっているからこそ板書。
- (G) 一見、見難い板書であるが、子どもたちにとってはすごく見やすい板書なのでは？ 教師が思っているより子どもはすごく板書を見ている。子どもたちにわかりやすいように敢えて書いている。
- (S) 子どもの思考が外れた時に、「なんだっけ？」「わからない」となってしまう板書でもある。引っ張って進めている子どもにとっては、良い板書。頭を整理するには適切なのか？ 振り返りの時にはどうか？
- (M) 再現性としてはどうか？ 板書の構造化とよく言われるが、実際どうなのだろう。
- (T) 活発に議論している分、この先が見えない感じ。それが怖いと思う子どももいるのでは？ 置いて行ってしまわないか。
- (S) ユニバーサルデザインの観点からは、最も遠いような板書ではないか。流れやゴールが見えない。板書がつかられていく過程も見えないから、見通しが立ちにくい。
(筆者)「象徴的な言葉をのせていく」という板書。ユニバーサルデザインって今どうなのだろう？ 見通しをもつことができる一方で、劇的なものが生まれにくくなってしまうという一面もある。
- (M) ユニバーサルデザインをやりながら疑問も感じていた。授業の流れを黒板の端に貼っておく。終わったらはがしていくというやり方。型にすることで安心してしまっていないか？？ ユニバーサルデザインは必要だが、教えやすいから採用ではない。学習者視点に立ってこそユニバーサルデザイン。「こういう形をとれば大丈夫」に陥っていないか。(苦野さんの本より) どういう板書が良いのか？
(筆者) 授業記録から、「自分だったらどう板書構成するか」を考えてみると面白い。公開の1日目には、授業を2時間行った。(今回の授業は、公開2日目の1時間。) その時は、言葉が黒板にたくさん書いてある状態で、板書としてはどうなのだろう？ と感じていた。
- (O) みんなの考えを整理するための板書と、沸騰させるための板書は違う。思考ツールを使う可能性も考えられる。(PMI = Plus, Minus, Interesting など) いつも同じが正解ではない。
- (G) 今求められている「深い学び」とユニバーサルデザインとの関連とは？ マニュアル化したらやりやすいけれど、それは本当に深い学びなのか？
- (L) 私は、これに近いような板書をする。板書を子どもが見た時に、つなげて新たな概念を生むことのできる板書が良いのではないか。しかし、今回の板書はキーワードだけすぎるのではないか。もう少し整理されて、子どもたち同士の意見のつながりや比較などが表されているとよかったのではないか。板書を見た時に誰もが意見を深められる板書こそ、ユニバーサルデザイン。整然とした板書等よりも、マップのような板書も良いのではないだろうか。(後略)

このように、この話し合いには、沈黙、板書構成、ユニバーサルデザインという視点が表れ、展開しているのである。

4. 参加者の得た成果と課題の考察

自主ゼミの活動において、参加者はどのような成果と課題をとらえたのであろうか。54頁からの表1と表2は、その一覧である。表中の記述に注目して、それを整理することで、参加者のとらえた成果と課題を明らかにするとともに、改善案を引き出していく。

4. 1 題材について

参加者が自主ゼミで扱った題材をめぐってとらえた成果は、大きく以下の2つに分類できる。

4. 1. 1 堀川小「個の学びと教育」、筆者小論、奈良女子大学附属小授業記録をめぐって

4. 1. 1. 1 堀川小の「個の学びと教育」

堀川小の「個の学びと教育」からは、参加者に以下のような成果が見られる。

学部3年のAは、「単元を通して子どもの成長を考える」と述べた。また、同3年のCは、「子ども達一人一人が積極的、自分自身と真剣に向き合う姿。先生達は、グイグイ引っ張るわけではないのに、熱心。」「『中庭』の実践。自分の思いを言えないという弱い部分と葛藤しながらも、人のために行動したいという芯の強さを生かしていく。自分にとって理想的な学びの過程。」と、子どもと教師の姿や個の学びの過程をとらえている。

学部4年のDは、「ちょうど学校でもオンライン学習の時期があり、個別の学び方に世の中の関心が集まる中、個別に子ども達をみるとはどういうことか、教師はどのような支援を続けていかななくてはいけないかを考える時の参考になった。この時期にふさわしい題材。」と、個別の学びと教師の支援について述べる。また、同4年のFも「今まで自分がよいと思っていた価値観を大いに揺さぶられた。最近、教員採用試験の2次対策をする中で、やっぱりあいった教育が求められているのだと実感する。4年生というタイミングで出会えてよかった。」と、自身の教育観を揺さぶられたことを綴った。

教職大学院1年であるHは、「子ども一人一人の理解を徹する堀川教育理念や実践から、子どもを一つの人格として尊重し、かけがえのない個として子どもを育てていく大切さを学んだ。」と綴った。また、同2年のJは、「学校現場で起きていること、行われていることを丁寧に見つめ、その背景にあるものをつぶさに拾い上げていくことで得られる新たな知見があるのだと、改めて感じた。」と述べた。

教職大学院（現職教員）のNは、「様々な実践をもとに、子どもの姿や教師の役割、裏側（校内研究）などの詳細を一つ一つ見つめる題材。私の所属するショートプログラムでは指導案や教材の検討、教材研究がメインなので。」と、自身の参加するプログラムとの違いから、学びを意味づけている。また、現職教員（ゼミOB）のRは、「堀川小の克己型の授業構成に、今の自分の問題解決授業を振り返るよい機会となった。」と、自身の授業を振り返っている。

このように参加者は、「単元を通しての子どもの成長」、「子どもと教師の姿と個の学びの過程」、「個の学びと支援という今の時期に適した題材」、「教育観を揺さぶられたこと」、「かけがえのない個として子どもを育てていくこと」、「学校現場で起きていることと、その背景を丁寧に見つめることで得られる知見」、「子どもの姿や教師の役割、校内研究などの詳細を見つめる題材」、「今の自分の問題解決学習を振り返ること」等を成果としてとらえているのである。

4. 1. 1. 2 筆者の小論

学部4年のFは、「櫻井先生の論文は、自分自身がはっとさせられたというか、身に染みる部分が多かった。」と述べ、教職大学院1年のHは、「『山場』については、今まで深く考えたことがなかったのでとても新鮮。『山場』には、教師が設定する山場、子ども一人一人の山場、クラス全体の山場等様々ある中でも、子どもが自分自身を超えようとして教師が焦る瞬間というとらえも非常に印象的。」と述べている。Hの「教師が焦る瞬間」という言葉は、ゼミの話し合いの中で出されたものである。

4. 1. 1. 3 奈良女子大学附属小授業記録

現職教員（ゼミOB）のRは、「梶田萬理子先生の『三年とうげ』。実践を見るのは3回目であったが、考え甲斐の

ある授業というものがあるのだなと思った。結局授業は教師の本気度なのだという感じである。」と、これまでのゼミへの参加経験も踏まえ、新たな気づきを述べている。

このように、特に「個の学びと教育」からの学びについて意味づける声が多く見られた。このことから、研究のねらいに迫るために、題材の設定は適切であったと考えられる。

4. 1. 2 本と授業記録・資料をつないで考える

学部4年のEは、「本からは見えない部分が、授業記録や資料から見えてきた。」と述べ、教職大学院2年のIは、「(8月3日の)最終回(授業記録をめぐって考え合う)は、DさんやMさんが、『個の学びと教育』の〇ページに載っていたこと…と話していた。このようにつなげて話していて、一冊の本を読むことで、このような成果が表れたと思った。」と述べている。

このように、少数ではあるが、本と授業記録や資料をつないで考えることができたことを意味づけている参加者が見られる。このことから、研究テーマに迫るために、活動計画がある程度効果的であったと考えられる。

一方で課題として出されたことについて、参加者の意見が重なったものを中心にして、次に3点述べる。

4. 1. 3 本・資料と映像とのセット、予習のあり方、教師の思いをとらえること

まず、本、資料に映像をセットすることの必要性である。学部3年のAは、「映像がない分、教室の雰囲気がわかりにくい。」と述べ、学部4年のFは、「本から学ぶというのが難しい部分(ある程度視点が固定される)があったが、これを踏まえて映像を見ると、今までと見方が大きく変わるのかなと、楽しみ。」と述べている。

この課題については、7月21日と8月3日の授業記録を題材にした場において、その記録に関わる授業映像を10分程度その場で共有するを行い、話し合いに入った。それまでは、本の内容と一致した授業映像がなかったことや、事前に授業映像をアップする技術が筆者になかったからである。

次に、事前の準備、本の読み込みをしっかりと行い、自分の考えをまとめて臨みたかったという意見である。学部3年のBは、「ゼミでの話し合いの前に自分の考えをしっかりとまとめておく。」と述べ、学部4年のFは、「本を1回読んだだけでは理解しきれなくて、余裕を持って複数回読むべきだった。」と述べている。一方で、教職大学院2年Jの「これまでのゼミではなかった、事前に資料を読んでくるということが有効。」という意見もあった。これまでは、ゼミ室に集まったメンバーで、その場で授業映像を視聴し、話し合いに入っていた。しかし、今回のオンラインとなり、事前に本や資料を読み込んでくることによって、話し合いの時間が多く確保できるという面とともに、事前準備の難しさという課題も見えてきたように考えられる。ただ、BとFの記述の背景にあるものは、ゼミでの話し合いをよりよいものにしたいと願うこと、つまり質の向上を求める動機が感じられる。

最後は、教師の思いをとらえることである。現職教員(ゼミOG)であるQは、「その子どもたちに向けて、教師がどのような思いを持っていたのかが分かると、今後の自分の授業改善のために、参考になる。」と述べた。また、教職大学院2年のIは、「批判的思考をする時に、実践者がどのような思いでそうしたのか、把握するべきではないか。それには、やはり実地が必要だが。」と述べている。

このような声が出された一因としては、この本には子どもの追究する姿が中心に記されており、教師の思いは抑制的に記されているということにもよる。一方で、本に描かれた子どもの姿から、それを見守っている教師の思いを想像してみることも大切なことである。そこで、このような声に応えるために、単元構想、学習指導案等の資料の配信を行い、教師の思いをよりとらえられるようにと、期待したのである。

4. 2 自主ゼミの展開について

参加者がとらえている成果について、以下に述べる。

4. 2. 1 全体の展開、話題提供、グループセッション

まず、全体の展開については、教職大学院1年(現職教員)L「とても話しやすく、得るものがあつた仕方」という意見とともに、留学生G、教職大学院(現職教員)M、現職教員(ゼミOB)Rにも支持する意見が見られる。

また、話題提供については、学部4年Dの「話題提供は、話し合いが拡散した時に立ち返ることのできる課題。」に関わる意見が、教職大学院(現職教員)N、現職教員(ゼミOG)Pからも寄せられた。

そして、グループセッションについては、学部4年Fの「Zoomで意外に話し合いが盛り上がる。グループセッションも、いつものゼミよりもいろいろな人が考えを述べたり、疑問を提示したりしやすい。オンラインだからこそよさも感じた。」に関わる意見が、学部4年のD・E、教職大学院1年Hからも寄せられた。

これまでのゼミでは、個人の考えを付箋紙に記した後で、全体的話し合いを中心にして進めてきた。これは、全体的場で自分の考えを語ることを、他の参加者の考えを聴いて学ぶことを重視してきたからである。しかし、学部生、院生は、少人数で気軽にたくさん語り合えることを求めているということも、新たな発見である。

一方で課題や改善案として出されたことについて、参加者の意見が重なったものを中心にして、以下に4つ述べる。

4. 2. 2 グループセッション1と2のつながり

他大学学部4年G「グループセッション1から2での話のつながりが難しかった。」という意見とともに、教職大学院2年I「共有の際に、それぞれのグループで出たキーワードについて捉えも話せたらよい。そして、次のセッションに移るとよりよくなる。」、現職教員（ゼミOG）の「グループセッション2をする際には、共有1で出た話題の中から視点を設定し、それについて話し合う。」という改善案も出された。

4. 2. 3 付箋、ホワイトボード機能などの活用

今回は、記録者による逐語記録の共有であったが、今後に向けての改善案も出された。学部4年Eの「付箋をリアルタイムで貼っていかれるツールの導入」や、教職大学院1年Hの「ホワイトボード機能を使って交流すると、情報が可視化されて整理しやすくなったり、意見につながりが持てそうになったりする。」という意見である。

4. 2. 4 全体的場での話しづらさ

教職大学院2年Iの「オンラインだと、なぜか言い出しが難しいと感じる。」、現職教員（ゼミOB）Rの「昔のゼミではあまりグループワークをやっていなかったもので、全体的場がもう少し長くてもいいのかと思う。しかし、zoomで全体的場で話しづらさも感じた。」という意見も見られた。このことは、次項4.3.3の全体発言の難しさという課題にもつながっている。

4. 2. 5 考えを整理する時間

その他として、学部3年Aの「質の高い意見が多く発表されており、内容の整理が追いつかないこともあったので、考えを整理する時間があればいいなと思った。」という意見もあった。話し合いの展開が早くなっていないか、参加者でわかり合っているのかどうかという課題である。このことは、オンラインであるからこそ、対面以上により配慮していく必要がある。

4. 3 心に残ったこと、学んだこと、言いたいことについて

参加者がとらえている成果は、大きく以下の2つに分類できる。

4. 3. 1 学部生、教職大学院生、現職教員の関わり合い

オンラインで実施したことによって、現職教員の参加者が増加したことが今年度の特徴である。勤務を終えてから、参加する現職教員も見られた。そのことによる学部生の意味づけから、まず見ていくことにする。

学部3年Aの「現職の先生の意見を聞く機会」、教職大学院2年Iの「オンラインだからこそ、現職の先生もいらっしゃる。」とともに、学部3年Cの「現職の方々がいるのには、ビビっていたが、意見を言いつらい等の雰囲気も無く、むしろ仕事の合間に勉強されているのが凄いなと思ひ、刺激ももらった。」というとらえも興味深い。

一方で現職教員は、学生との交流をどのようにとらえているのであろうか。教職大学院1年Lは「学部生の純粋で鋭い視点での問題提起が、私には無い視点であったり、勉強になることだったりした。」と述べ、同1年Nは「学部生が経験のあるなしに関わらず自分の疑問を大切にしていること。自分の感じ方や、抱いた疑問について、すぐに納得するのではなく、積極的に表に出していくという姿勢がとても重要。」、現職教員（ゼミOG）Qは「参加されている皆さんが資料を深く読み込み、意見を出していることに驚いた。学生の発言も鋭く、刺激を受けた。」と述べる。また、教職大学院1年Mは「若い人のひたむきな思いを感じ、本当に刺激になっている。我々現職は、一緒に考えるというスタンスを忘れずにいたい。」と述べる。学生の純粋さ、積極性等にふれ、「一緒に考えるというスタンス」という言葉も表れている。このように、現職教員も学生から刺激を受けているのである。

教職大学院2年のJは、「私にとって、学部生と交流する貴重な場である。『本当にこの実践はできるのか？』『本当にこのやり方でいいのか？』という論点が多かったことは、刺激的。（私もそんなふうに考えていた時があったなあと）」と述べている。学部生を経て教職大学院生となり、教育実習経験もより積んだ現在の自分から過去の自分を振り返っているのである。

このように参加者は、学部生、教職大学院生、現職教員がともに学び合えたことを意味づけている。このことは、

事前には想定しなかったことであるが、ゼミの質の向上に大きく関わった要因であると言えよう。

4. 3. 2 学びを課題の解決に生かす、学校で学ぶ意義、理論を実践に還元する、自分の求める教育観・授業像、心に残ったキーワード

ここでは、学部生のとらえた意味づけについて述べる。学部3年のBは、「課題として出された指導案の授業のまとめ方で悩んでいる時に、ゼミでの話し合いから糸口が見つかって納得のいく方法を考えることができた。」と述べている。ゼミでの学びを授業課題の解決に生かすことができたのである。同3年のCは、「どの実践の中でも『集団過程』が出てきたことが、印象的。授業を考える時に、共に学ぶ友達がいるということ（子ども⇔子ども）を忘れてはならない。学校で学ぶ意義は、そこにあるのではないかと考える。」と述べ、学校で学ぶ意義について考えている。

学部4年のDは、『『児童の実態や発達段階を考慮した授業づくりが必要』という意見があり、一学生として学ぶSDGs(ESD)と実践者として捉えるそれは、同じようで異なっているところも多いということが分かった。(中略)では、それを自分はどうのように実践に還元するのかということを見ると(中略)時間を経て実践者への意識が遠のいていたところがあるので、選択実習前に改めて考えることができて気が引き締まった。』と述べ、大学で学んだことを授業実践にどのように還元するのかということについて考えている。そして、秋に控えている選択実習のことも思い描いている。このようなDの意味づけも、現職教員との関わり合いの中から生まれてきたものである。同4年のFは、『『個の学びと教育』を読んでいて、結局今まで自分が受けてきた授業から発想が抜け出せていないのだなあと、実感。あの授業をするには、想像がつかないし、できる気がしないのだが、いつかは生徒が主体となって『学んでいく』授業をつくれたらいいなあと、最近思っている。』と述べている。自分の授業観を見直し、求める授業像を確かにしているのである。

また、心に残ったキーワードを綴っている参加者も見られた。他大学学部4年Gの「情」,「個発→個着」。留学生(現職教員)Kの「気に入ったキーワードは①山場 ②個発と個着 ③一人ひとり ④価値観 ⑤はたらきかけ ⑥寄り添う。」である。

このような参加者の意味づけからも、ゼミの質をとらえることができる。

一方で課題として出されたことについて、参加者の意見が重なったものを中心にして、以下に述べる。

4. 3. 3 全体の話し合いでの発言

前項4.2.4の全体での話しづらさに関わる意見が、ここにも見られた。教職大学院1年Hの「なかなか全体の場で発言することができなかつた。もっと自己解放してオープンに話すことができたなら」、同(現職教員)Lの「最後の全体共有のところで、もっとたくさんの人の考えを聞けたらと感じた。特に、学部生の。もしかしたら、私たち現職が居ることで言いづらいところがあるのならば、私たちが発言の仕方等を見直したい。」、現職教員(ゼミOG)Qの「全体での話し合いの際に、意見が出づらいことがあるため、話し合う視点を参加者の中から投げかけられると、話し合いが深まるか。」である。

ただ、学部生からはそのような意見が出されていない。語りたいことをもっていても、全体の話し合いでは聞くことで学べばよいと考えているからであろうか。グループでたっぷりと話し合ったので、全体では語るなくてもよいと考えているからであろうか。Qの言うように「視点がないため、何を出せばよいかわからない」のでであろうか。筆者も、Lの言う「もっとたくさんの人の考えを聞けたら」と願っている。それは、今回のゼミで心に残ったことや考えたことを語ることでよいと思う。この課題については、その要因を探り、改善していく必要がある。

5. 研究の成果と課題

本研究を通して得られた成果と課題を以下に述べる。

(1) 成果としては、次のものが引き出された。

- ① 「個の学びと教育」からの学び。本と授業記録・資料をつないで考えたこと
- ② 全体の展開、話題提供、グループセッションが効果的であったこと
- ③ 学部生、教職大学院生、現職教員の相互に刺激があり、学びが生まれたこと

このように、研究のねらいに迫るために、題材の設定、活動計画、各回の活動内容は適切であったと考えられる。また、オンラインであったからこそ現職教員の参加も可能となり、そのことで参加者相互に刺激があり、学びが生まれた。

(2) 課題としては、次のものが引き出された。

- ① 本・資料とともに、可能であれば映像をセットすること
- ② グループセッション1から2へのつながり
- ③ 全体の話し合いの場での発言

このように、各回の活動の展開に関わる課題が明らかになった。②と③の課題は、対面であっても難しいことであり、配慮を要することであるが、オンラインでは、一層の配慮と具体的な手だてが求められるのである。

参考文献

- (1) 松本康,「オンライン授業の行方」, 社会科の初志をつらぬく会, 考える子ども No.403, pp.27-30, 2020年11月
- (2) 拙稿,「子どもの姿で語り合う校内研究へ」, 学事出版, 月刊プリンシパル2018年7月号, pp.16-19, 2018年7月
- (3) 拙稿,「奈良の授業に表れる『山場』とその場を支えているもの」, 奈良女子大学附属小学校, 学習研究第405号, pp.16-21, 2018年1月
- (4) 富山市立堀川小学校著,「個の学びと教育」, 明治図書, 2018年6月
- (5) 梶田萬理子, 小3国語科「三年とうげ」, 奈良女子大学附属小学校公開研究会, 2003年6月
- (6) 政二亮介, 小4社会科・総合「佐伯宗義がのこしたもの」, 富山市立堀川小学校公開研究会, 2017年6月
- (7) 富山市立堀川小学校,「教育懇談会—子どもを捉えるということ—」, 教育実践 NO.125, pp.34-42, 2018年3月
- (8) 山口浩二,「教育懇談会を機に考える」, 富山市立堀川小学校 教育実践 NO.125, pp.43-44, 2018年3月
- (9) 仲井志保,「弱い自分を変えられる職業」, 富山市立堀川小学校 教育実践 NO.125, pp.49-50, 2018年3月

資料 表1 ゼミ参加者のとらえた成果 (その1)

	①題材について	②ゼミの展開について	③心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
成 果	<p>○常識にとらわれないで、子ども達に寄り添った教材研究(A)</p> <p>○単元を通して子どもの成長を考える。(A)</p> <p>○教材の中身に注目(A)</p> <p>○去年までのゼミではできない経験(A)</p> <p>○今までのゼミとは異なり、ゼミ全体を通して1つのテーマを扱ったのは初めてだったが、また違った学び。(E)</p> <p>○今までのゼミと題材の形式が違ったように感じて、とても新鮮。</p> <p>○異なる題材で話し合った内容が関わり合っていた。(B)</p> <p>○参加者それぞれが問題意識を持っている部分(B)</p> <p>○堀川小の本から、子ども達一人一人が積極的、自分自身と真剣に向き合う姿。先生達は、グイグイ引っ張るわけではないのに、熱心。(C)</p> <p>○「中庭」の実践。自分の思いを言えないという弱い部分と葛藤しながらも、人のために行動したいという芯の強さを生かしていく。自分にとって理想的な学びの過程。(C)</p> <p>○「個の学びと教育」も、今まで自分がよいと思っていた価値観を大いに揺さぶられた。やっぱりあんな教育が求められているのだと実感する。4年生というタイミングで出会えてよかった。(F)</p> <p>○本という共通の土台(D)</p> <p>○堀川の本をじっくりと読める機会。(M)</p> <p>○学校で目指している子ども像や、学年毎にどのような個の学びが可能になるのかを知る。(D)</p> <p>○実際に堀川小の授業を参観したことのある先生方から授業の実際の雰囲気も教えてもらった。(D)</p>	<p>○「そういう視点もあるのか」と知る。(C)</p> <p>○自分の発言したことに対して、誰かが反応してくれる。(C)</p> <p>○現職の方々がいるのには、ビビっていたが、意見を言いづらい等の雰囲気も無く、むしろ仕事の合間に勉強されているのが凄いなと思ひ、刺激もらった。(C)</p> <p>○話題提供は、話し合いが拡散した時に立ち返ることのできる課題。(D)</p> <p>○話題提供は、オンライン下でも有効な方法。(N)</p> <p>○グループは、一人一人が発言する機会(D)</p> <p>○グループセッションでは、全体だと聞きづらいうちよとした疑問や感想を聞くことができた。(E)</p> <p>○Zoom で意外に話し合いが盛り上がる。(F)</p> <p>○グループセッションも、いつものゼミよりもいろいろな人が考えを述べたり、疑問を提示したりしやすい。オンラインだからこそこのよさも感じた。(F)</p> <p>○グループで、個人の意見を言いやすく、多様な意見を聞いたりする。(H)</p> <p>○共有1と共有2そして全体での話し合い (G)</p> <p>○バランスの良い流れ (R)</p> <p>○とても話しやすく、得るものがあった仕方。(L)</p> <p>○よかったと思う。(M)</p> <p>○これまでのゼミではなかった、事前に資料を読んでくるといことが有効。(J)</p> <p>○いつも途中からの参加であったが、参加者の真摯な話し合いの様子について引き込まれた。(O)</p>	<p>○現職の先生の意見を聞く機会(A)</p> <p>○オンラインだからこそ、現職の先生もいらっしやる。(I)</p> <p>○多様な教育観に触れて考えを深める。(A)</p> <p>○様々な授業実践を知る。(B)</p> <p>○参加メンバーの大切にしていることが見えてきた。(B)</p> <p>○新たな問題意識を持てた。(B)</p> <p>○課題として出された指導案の授業のまとめ方で悩んでいる時に、ゼミでの話し合いから糸口が見つかって納得のいく方法を考える(B)</p> <p>○どの実践の中でも「集団過程」が出てきたことが、印象的。授業を考える時に、共に学ぶ友達がいるということ(子どもと子ども)を忘れてはならない。学校で学ぶ意義は、そこにあるのではないかと考える。(C)</p> <p>○「児童の実態や発達段階を考慮した授業づくりが必要」という意見があり、一学生として学ぶ SDGs (ESD) と実践者として捉えるそれは同じようで異なっているところも多いということが分かった。(中略)では、それを自分はどうのように実践に還元するのかということ考えると(中略)時間を経て実践者への意識が遠のいていたところがあるので、選択実習前に改めて考えることができ気が引き締まった。(D)</p> <p>○「個の学びと教育」を読んでいて、結局今まで自分が受けてきた授業から発想が抜け出せていないのだなあと、実感。あの授業をするには、想像がつかないし、できる気がしないのだが、いつかは生徒が主体となって「学んでいく」授業をつくれたらいいなあと、最近思っている。(F)</p> <p>○様々な教育用語が作られたりしているが、その解釈を鵜呑みにせず、自分の持っている教育観と、自分が今までと今に出会っている仲間の意見を照らし合わせて取捨選択していく。(G)</p>

資料 表1 ゼミ参加者のとらえた成果（その2）

	①題材について	②ゼミの展開について	③心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
成 果	<p>○個別に子ども達をみるとはどういうことか、教師はどのような支援を続けていかなくてはいけないかを考える時の参考になった。この時期にふさわしい題材 (D)</p> <p>○本からは見えない部分が授業記録や資料から見えてきた。(E)</p> <p>○授業記録と、本で学んだこととをつないで考える。本を読んだからこそ。(I)</p> <p>○櫻井先生の論文は、自分自身のはっとさせられたというか、身に染みる部分が多かった。(F)</p> <p>○櫻井先生の「山場」。子どもが自分自身を超えようとして教師が焦る瞬間。(H)</p> <p>○1つの本をじっくりと読み進めることで、表面だけでなく、内容や実践の理解を通じて深く学ぶ。</p> <p>○子ども一人一人の理解を徹する堀川の教育理念や実践から、子どもを一つの人格として尊重し、かけがえのない個として子どもを育てていく大切さを学んだ。(H)</p> <p>○学校現場で起きていること、行われていることを丁寧に見つめ、その背景にあるものをつぶさに拾い上げていくことで得られる新たな知見があるのだと、改めて感じた。(J)</p> <p>○教師の指導・支援が素晴らしい。(K)</p> <p>○本の記載で見えている部分と、また疑問をぶつけ合うことで、見えていなかった部分にも目がいくようになった。(L)</p> <p>○授業記録(逐語録)を読み深めていくことで見えてくるものがあった。(L)</p> <p>○様々な実践をもとに、子どもの姿や教師の役割、裏側(校内研究)などの詳細を一つ一つ見つめる題材。(私の所属するショートプログラムでは指導案や教材の検討、教材研究がメインなので)(N)</p> <p>○多様な見方が広がる素晴らしい題材(O)</p>		<p>○はじめは情という起爆剤のようなものを子ども達に出会わせられるかが鍵になる。(G)</p> <p>○「個発→個着」こそ、子ども達の切実性や問いに迫るために、教師が心得る必要がある。(G)</p> <p>○気に入ったキーワードは①山場 ②個発と個着③一人ひとり ④価値観⑤はたらきかけ⑥寄り添う。</p> <p>○交流から学ぶ。(H)</p> <p>○毎回参加されている人が、メキメキと力を付け、考え方を豊かにしている。継続は力なり。(I)</p> <p>◎学部生と交流する貴重な場。「本当にこの実践はできるのか?」「本当にこのやり方でいいのか?」という論点が多かったことは、刺激的。(私もそんなふうと考えていた時があったなあと)(J)</p> <p>○子どもと関わることの面白さ、楽しさ。教師が子どもと一緒に学んでいく姿が大事。(K)</p> <p>◎今学期のゼミは楽しかった。日本の大学生と日本の学校の先生方も話し合ったり、意見を聞いたり、情報交換・交流ができてとてもよかった。今学期のゼミからいろいろ学べて、研究内容にやりがいを感じるきっかけになる。(K)</p> <p>○学部生の純粹で鋭い視点での問題提起が、私には無い視点であったり、勉強になることだったりした。(L)</p> <p>○若い人のひたむきな思いを感じ、本当に刺激になっている。我々現職は、一緒に考えるというスタンスを忘れずにいたい。(M)</p> <p>○学部生が経験のあるなしに関わらず自分の疑問を大切にしていること。自分の感じ方や、抱いた疑問について、すぐに納得するのではなく、積極的に表に出していくという姿勢がとても重要。(N)</p> <p>○参加されている皆さんが資料を深く読み込み、意見を出していることに驚いた。学生の発言も鋭く、刺激を受けた。(Q)</p>

資料 表1 ゼミ参加者のとらえた成果 (その3)

	①題材について	②ゼミの展開について	③心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
成 果	<p>○どの題材もたいへんよい学びにつながった。(P)</p> <p>○子ども同士で学び合う姿が分かり、私が目指す理想の形を学ぶことができる題材 (Q)</p> <p>◎堀川小の克己型の授業構成に、今の自分の問題解決授業を振り返るよい機会となった。(R)</p> <p>○梶田萬理子先生の「三年とうげ」。実践を見るのは3回目であったが、考え甲斐のある授業というものがあるのだなと思った。結局授業は教師の本気度なんだという感じである。(R)</p>		<p>○子どもの姿から教師の役割を考えるということの大切さを再認識。考え続けることが必要。(N)</p> <p>○状況が改善したら、行ってみたい学校が増えた。(O)</p> <p>○実際の映像を見せてもらったことで、紙面から読み取れない子どもの姿が分かった。(P)</p> <p>○「教師が教えたことよりも子どもが自ら学び取ったもののほうが力になる。」ということがこのゼミの今も昔も変わらない価値観である。でも学部のとときの授業の見方、現職1年目の時の自分の見方、6年目の時の自分の見方は全然違う。だから現職で忙しい中でも参加しようと感じる。(R)</p> <p>○4年生にとっては、OB・OGや現職が話まくっているのは鬱陶しいと思う。(そんなことないとおっしゃるかもしれないが、学部のとときの私はそう思っていた。笑) それでもこのゼミに参加しようと思うのは、教育観を共にした仲間と自由に語り合う場は、仕事の世界にはないからである。「ああ、4年生に悪いなあ」と思いながらも参加してしまうのは、このような空間が私にとってとても貴重な学びであるからである。(R)</p>

資料 表2 ゼミ参加者のとらえた課題

	①題材について	②ゼミの展開について	③心に残ったこと、学んだこと、言いたいこと等
課題	<p>●映像がない分、教室の雰囲気はわかりにくい。(A)</p> <p>●本から学ぶというのが難しい部分(ある程度視点が固定される)があったが、これを踏まえて映像を見ると、今までと見方が大きく変わるのかなと、楽しみ。(F)</p> <p>●1回読んだだけでは理解しきれなくて、余裕を持って複数回読むべきだった。(F)</p> <p>●教育論を読んでもみるのもよいか。(M)</p> <p>●その子どもたちに向けて、教師がどのような思いを持っていたのかが分かると、今後の自分の授業改善のために、参考になる。(Q)</p> <p>●「子どもの姿で語り合う」ということとともに、「授業の構想力」という視点も大切。(R)</p>	<p>●考えを整理する時間 (A)</p> <p>●グループでの話し合いを全体で共有する人は、司会の人に指定してもらう方が、準備ができる。(B)</p> <p>4 運営上の改善</p> <p>●大体の流れや、システム上の注意事項を載せた資料を展開して、司会役を徐々にみんなまで回していけたらよい。(E)</p> <p>●付箋をリアルタイムで貼っていかれるツールの導入。(E)</p> <p>●ホワイトボード機能を使って交流すると、情報が可視化されて整理しやすくなったり、意見につながりが持てそうになったりする。(H)</p> <p>●グループセッション1から2での話のつながりが難しかった。(G)</p> <p>●グループセッション2をする際には、共有1で出た話題の中から視点を設定し、それについて話し合う。(Q)</p> <p>●共有の際に、それぞれのグループで出たキーワードについて捉えも話せたらよい。そして、次のセッションに移るとよりよくなる。(I)</p> <p>●昔のゼミではあまりグループワークをやっていなかったもので、全体の方がもう少し長くてもいいのかと思う。(しかし、zoomで全体場で話さずらさも感じた。)(R)</p> <p>●オンラインだと、なぜか言い出しが難しいと感じる。(I)</p> <p>●提案者の話題提供もグループ1の話し合いをより良くするために毎回あっても良い。(P)</p> <p>●今までのようにゼミ室に集まる手間が省ける分、参加人数も多くなりやすく(私の参加した回はですが)、みんなの話を聞き切れなかったことは、残念。(J)</p> <p>●グループセッションでメンバーを分ける時は、同じメンバーにならないように分けたらいい。(K)</p>	<p>●ゼミでの話し合いの前に自分の考えをしっかりとまとめておく。(B)</p> <p>●なかなか全体場で発言することができなかった。(H)</p> <p>●最後の全体共有のところで、もっとたくさんの方の考えを聞けたらと感じた。特に、学部生の。もしかしたら、私たち現職が居ることと言いつらいところがあるのならば、私たちが発言の仕方等を見直したい。(L)</p> <p>●全体での話し合いの際に、意見が出づらいことがあるため、話し合う視点を参加者の中から投げかけられると、話し合いが深まるか。(Q)</p> <p>●批判的思考をする時に、実践者がどのような思いでそうしたのか、把握するべきではないか。それには、やはり実地が必要だが。(I)</p>